SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

Practice and Evaluation of Japanese Language Classes in Junior High School Focusing on Reading and Expression(writing,speaking,discussing)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木下, 聡美, 坂口, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00027126

実践報告

読書と表現を核にした中学校国語科の授業実践と評価

－カリキュラムと評価（「追求の記録」・定期考査）の工夫－

木下　聡美・坂口　京子

（静岡大学教育学部附属静岡中学校・静岡大学教育学部）

Practice and Evaluation of Japanese Language Classes in Junior High School Focusing on Reading and Expression (writing,speaking,discussing)

Satomi Kinoshita and Kyoko Sakaguchi

要旨

国語科における問いの追求や学びの深化とはどのようなものかについて，３年間のカリキュラムと授業記録，子どもたちの追求過程を報告する。カリキュラム構想では「生き方を考える」作品を多く読み対話し表現にひらくことと，子どもの熟達と理解の深度を重視している。「追求の記録」は，子どもが自身の学びを記録するとともに，教師の見取りや評価を統合する機能を有する。定期考査は子どもと教師が学びの状況を見取り，新たな読書経験や価値観と出会う場として位置付けている。

キーワード：　読書　表現　評価　カリキュラム　「追求の記録」　定期考査問題

１　はじめに

本稿では，読書と表現を核にした国語科の授業実践と評価について，2019 年度静岡大学教育学部附属静岡中学校（以下「静岡中」）の第３学年を中心に報告する。以下，①静岡中国語科の教育研究の概要を説明し，本稿の目的を述べた上で，②2019 年度第３学年の国語教育実践と評価の実際について報告する。

静岡中は 2014 年度から 2019 年度までの６年間，「共に創りあげる授業―資質・能力を育みながら『教科ならではの文化を味わう子どもたち』－」を研修主題として教育実践に取り組んできた。国語科では「想像力や感受性を働かせて作品（言葉）の世界に浸る営み，言葉を吟味しながら自分の思いを発信していく営み，自分自身を見つめ直す営み」を「教科ならではの文化」と捉え，題材化（切実感を生む題材の選定と出会い），問いの共有，教科ならではの対話を視点として実践研究を重ねてきた。以上の成果は，村山功・静岡大学教育学部附属静岡中学校『対話が深める子どもの学び―教科ならではの文化を味わう授業―』（2019 年，明治図書）や、各年度の『教科実践のまとめ―授業実践事例集―』ですでに報告している。

以上の実践では，子どもが「どのように学ぶか」を視点として授業を構想するとともに，読書と表現を核にした学習活動を展開してきた。主な実践は【資料 1】のとおりである。ここでいう「読書」は，文庫本や新書とともに中心教材の関連資料や，複数教材を読むことを含む。また「表現」は，対話や話し合いとともに，レポートや説明文等を「書くこと」を含む。

【資料 1:読書と表現を核にした授業実践】

年度	単元名
2015 (H27)	人生で大事なもの・かけがえのない美しさとは―文庫版のあとがきから迫る　重松清『小学五年生』より― （「ライギョ」「おとうと」「ケンタのたそがれ」「プラネタリウム」「バスに乗って」の５作品） 【第１学年・鈴木康弘教諭】
2016 (H28)	説明文を創りあげる－新書版『ディズニーランドという聖地』との比較を手がかりに「聖地」を問う― 【第２学年・鈴木康弘教諭】
2016 (H28)	「素顔同盟」－象徴表現から作品を味わう― （すやまたけし「一輪車の村」，阿部公房「鞄」，別役実「寂しいお魚」） 【第３学年・梶山哲耶教諭】
2018 (H30)	勇者メロスを語ろう （「走れメロス」の CM 動画） 【第２学年・木下聡美教諭】
2018 (H30)	校歌で MV（ミュージックビデオ）を制作する効果―教科横断系の MV 制作過程を通じて磨かれる言葉のチカラ― （複数の MV，生徒会誌（草野心平の講演に対する生徒の感想），50 周年記念誌，他校の草野心平の校歌歌詞，草野心平の詩「春のうた」「ごびらっふの独白」「秋の夜の会話」「島民」） 【第３学年・梶山哲耶教諭】

例えば 2016（平成 28）年度の単元「説明文を創り

あげる」は，教科書教材「ディズニ―ランドという聖地」（学校図書２年）と岩波新書『ディズニ―ランドという聖地』（1990 年）とを比較して読み，説明文を書く学習を構想した。筆者の主張と具体例を明らかにして新たに説明文を書く活動が，題名にある「聖地」の内実を問う探究過程となるよう単元を構想している。また説明文を書く過程および書き終えた段階に，「読むこと」「書くこと」それぞれの目標に照らす相互評価・自己評価の場を設定した（2018 坂口）。

【資料１】に挙げた実践は各年の研究協議会で発表し成果をあげてきたが，一方で次のような課題も生じている。

・教科書教材を拡張し題材化する上での基準は何か
・読書と表現を核にした授業実践を展開する上で、１年間あるいは３年間のカリキュラムをどのように構想していくか
・子どもの自己評価や相互評価，教師の評価をどのように位置付けていくか

これらの課題は，授業構想における主要概念をどのように抽出して構造化（カリキュラム化）していくかという課題であり，子どもと教師の評価をどのように位置付け，主体的な学習を実現していくかという課題でもある。

本稿では，以上の解決を目指す一途として，静岡中国語科の日常的な授業実践と評価の実際について，以下の３点から報告する。①2017～2019 年度のカリキュラムと題材配列，②2019 年 12 月（第３学年）で実施した二つの単元（「大人になるとはどういうこと？」「私の初恋物語」），③2019 年８月に実施した第３学年国語科定期考査問題とねらい。

２　授業実践と評価

２．１　授業実践（2017 年度から 2019 年度）

（１）　子どもたちに願う姿

国語の授業を通して多様な作品に出会い，読み味わうことや，他者と感想を交流させることによる理解の深まりを味わうことで，子どもたちは文章を読むことの面白さに気づき，豊かな読書経験につなげていくことができる。その経験は，「自立した読み手」を育てることでもある。授業において，異なる視点で読み深めてきた仲間と語り合うことによって「読みの視点」は増えていく。この視点は他の作品に出会ったときも，文章構成や描写の工夫に気づき，多様な読み取りができることにつながるだろう。そのような経験を積み重ねることで，一人の読みと手として言葉に対する「感度」が上がり，読むことを楽しむ姿につながるはずである。（ここで述べた「感度」とは，一つ一つの言葉の意味や概念，象徴性に気づき，読み取りの幅を広げる力のこととしている。）

さらに，子どもたちが大人になったとき，我が子へ読み聞かせをするときや，幼い頃に読んだ本に再び出会ったとき，一人の読み手として新たな発見をしながらページをめくることができる人になってほしいと願っている。

（２）　カリキュラムを通した子どもたちの学び

【資料 2～4】は 2017～2019 年度に実施した授業実践である。３年間のカリキュラムを通して大事にしてきた大きなテーマは，「生き方を考える」ということである。多くの作品を読み，描写の工夫や構成の妙に触れていくことで，作品の根底にある「人物の生き方や考え方」に触れることができる。その作品の登場人物の生き方や，筆者が主張していることを考えていくことで，子どもたちは自分の価値観を揺さぶられる経験をすることになる。思いが揺さぶられるような作品と出会えば，子どもたちはその思いを他者と共有したくなるだろう。その揺さぶりを題材構想や，題材のつながりによって生み出すことが必要である。

他者に伝えたい思いが対話を生み，相手に伝わるように言葉を吟味し，説得力を持たせるために叙述をさらに読み深めることになる。この繰り返しをしていくことで，子どもたちは作品の本質を語り合うことの面白さに気づき，自分の思いを表現することの価値を見いだすことができる。

【資料 2：2017 年度授業実践（1 年生）】

月	単　元	授業構想	読書・表現
4	なりきって詩を書こう －工藤直子「のはらうた」－	「のはらうた」から 15 編の詩を取り上げ，気に入った詩の表現の工夫や描写の面白さについて語り合う。	作者の工夫を取り入れ，動物や植物になりきって詩を書く。（創作詩）
5	題名の秘密に迫る －杉みき子「飛べかもめ」－	主人公の心情の変化が情景描写によって描かれていることを読み取り，題名の意味することについて語り合う。	「飛べかもめ」は主人公のどのような思いを表しているかＡ４用紙一枚にまとめる。（レポート）
6	視点を変えて読む －芥川龍之介「蜘蛛の糸」－	お釈迦様の視点とカンダタの視点 から蜘蛛の糸を読み，人の欲や罪について考える。	蜘蛛の糸が切れたことは何を表すか，Ａ４用紙一枚程度にまとめる。（レポート）

9	象徴表現を読む－別役実「空中ブランコ乗りのキキ」－	色の描写，鳥の象徴性を考え，キキが何を大事にして生きたかったのかについて考える。	白い大きな鳥が何を象徴しているかについて考えたことを基に，キキに手紙を書く。（手紙）
10	二つの視点で読む －野坂昭如「ウミガメと少年」	ウミガメと少年の視点から戦争を読み解き，ウミガメが象徴することや，二つの視点で戦争を描くことの効果を考える。	筆者が二つの視点で戦争の世界を描いた意図について考えたことをＡ４用紙一枚程度にまとめる。（レポート）
11	1000 年読み継がれる「竹取物語」の魅力	絵本，日本昔話（アニメ），「かぐや姫」（映画），原文(現代語訳を含め全文)を読み比べ，「竹取物語」の魅力がどのように描かれているかについて語り合う。	なぜ1000年も読み継がれてきたのか，考えたことを「竹取物語」の魅力新聞としてＡ４一枚にまとめる。（新聞）
1	「技」を極める －二つの作品を比較して考える－	吉橋道夫「ぬすびと面」とすやまたけし「仮面師の弟子」を読み比べ，「面を打つ」ことをどのように考えるか，技を極める職人の姿に迫る。	二つの作品を比較して考えた「面を打つ」ことの意味をレポートにまとめる。（比較レポート）
3	作品の魅力を伝える －「少年の日の思い出」－	作品の面白さを伝えるポップを作成することを通して，登場人物の「思い出」の捉え方について読み取る。	「読んでみたい」と思えるキャッチコピーとポップの構成を考え，作品のイメージを表現する。（ポップ）

【資料３：2018 年度授業実践（2 年生）】

月	単　元	授業構想	読書・表現
4	形とは何か －菊池寛「形」－	主人公が考える「形」とは何かということを読み取り，人は何を大事にして生きているかについて考察する。	「形」とは何かを考え，主人公の考え方に対する自分の意見をＡ４一枚程度にまとめる。（レポート）
5	描写の工夫に注目して読もう －芥川龍之介「トロッコ」－	情景描写や行動描写に注目し，最後の場面で語り手が何を伝えているのか，主題を読み取る。	大人になった良平の視点で描くことの効果について，読み取ったことをＡ４一枚程度にまとめる。（レポート）
6	父親像を読み取ろう －向田邦子「字のない葉書」，「父と風船」，「父の詫び状」，「伽哩伽」－	向田邦子のエッセイ４作品を読み比べ，作者にとっての父親像はどのようなものだったかを読み取る。	筆者にとっての父親像をもとに，筆者になりきって父親に宛てて手紙を書く。（手紙）
7	説得力のある文章を書こう －安田喜憲「モアイは語る」，最相葉月「科学はあなたの中にある」－	二つの作品を比較し，説得力を持たせるために，筆者が工夫している文章構成や，例示の仕方を読み取る。	自然や環境保護に対してどのように考えていけばよいか，意見文を書く（意見文）
10	勇者メロスを語ろう －太宰治「走れメロス」－	語りの視点の効果について考えるために，始めに新美南吉の「ごんぎつね」を読む。その後，「走れメロス」を朗読しているＣＭ動画を視聴し，一般の人たちがもっている「勇者」に対するイメージを共有し，「勇者とは何か」という問いを追求する。	「走れメロス」で描かれている勇者像に対する自分の考えをＡ４用紙二枚程度にまとめる。（レポート）
11	生き方を考える －平家物語「敦盛の最期」，「木曾の最後」，「扇の的」，「祇園精舎」－	始めに「敦盛の最期」，「木曾の最後」，「扇の的」の三つの作品を読み比べ，武士たちが大事にしていた名誉やプライドについて語り合う。その後，冒頭の「祇園精舎」を読み，無常観について考え，武士たちの生き方について追求する。	「無常観」や「名誉」をキーワードに，作品を比較して考えたことをＡ４用紙二枚程度にまとめる。（比較レポート）
12	「違くない？」は正しい日本語？ －日本語の文法について考えよう－	助詞の違いによるニュアンスの変化や用言の活用について，身近な事象を取り上げて考え，日本語の変化について話し合う。	話し合いをふまえ，日本語の特徴について考えたことを，Ａ４一枚程度にまとめる。（レポート）
1	短歌の世界を味わう	複数の短歌を学級で読み味わった後，４人のグループごとに一首ずつ短歌を取り上げ，その短歌の魅力や描かれている世界観についてグループごとに授業を行う。	自分たちが取り上げた短歌と他の短歌を比較し，それぞれの短歌につて考えたことをＡ４用紙一枚程度にまとめる。（レポート）

2	新元号を考えよう	4 月に発表される新たな元号を考えるために，過去の元号の意味や改元の時代背景，使われている言葉の傾向を分析しい，新たな時代に望むことを漢字二文字で表す。	なぜその元号を考えたか，具体的な理由を表しながらプレゼンテーションを行う。（プレゼンテーション）
2	筆者たちが見たものは何か －ジョー・オダネル「目撃者の眼」，石垣りん「挨拶－原爆の写真に寄せて」－	それぞれの作品に描かれた，筆者が見たものや感じたことについて読み取る。エッセイと詩を読み比べることで，戦争をどのように描いているかについて語り合う。	二つの作品を比較し，戦争をどのように捉えているか，自分の考えを 1200 字程度でまとめる。（意見文）
3	すやまたけし「素顔同盟」	川が象徴することや，仮面を外すことの意味を考えることを通して，本音で語ることや平和の意味について考える。その後すやまたけしの「緑の心臓」や「奇機械怪報告書」を読み，自分を表現することの意味を考える。	自分らしさとは何か，作品を読んで考えたことをＡ４用紙二枚程度にまとめる。（レポート）

【資料 4：2019 年度授業実践（3 年生）】

月	単　元	授業構想	読書・表現
4	15 歳の心を読む －谷川俊太郎「春に」，長田弘「最初の質問」－	二つの詩を比較して，思春期の心の動きや幸福をどのように捉えるかということについて語り合う。	詩と自分の気持ちを比較し，幸せや成長をどのように捉えるか，Ａ４用紙一枚程度にまとめる。（レポート）
5	自由とは何か －安部公房「鞄」－	「鞄」によって自由を制限されることは何を意味しているのか，「道」は何を現すのかなど，象徴表現に注目して読むことで，主題に迫る。	自由とは何かというテーマで作品を通して考えたことを基に，自分のＡ４用紙二枚程度で意見を書く。（レポート）
7	題名を想像して読もう－浅田次郎「蝉の声」－	「批評の言葉をためる」で批判と批評の違いについて考えた後，題名が何かを想像して作品を読み。祖父が和男に伝えたかったことや，和男が考えたことを語り合う。	「これからの社会をどのように生きていくかについて，作品のメッセージを基に考えたことを 800 字程度でまとめる。(批評文)
9	自分を振り返ろう －「失敗」から学んだこと－	「失敗から学んだこと」をテーマに自分の生活をふり返り，今日までの自分の成長やこれから何を大切にして生活していくかということについて作文を書く。	自分の体験を 800 字以内で書く（体験作文）
10	筆者の主張を比較分析しよう －今道友信「温かいスープ」，猪口邦子「パールハーバーの授業」，田中真知「黄金の扇風機」，千住博「サハラ砂漠の茶会」－	四つの文章を比較して，社会を多面的に見ることや，美の捉え方の変化について，筆者の主張の相違点や共通点について語り合う。	多文化社会において異文化をどのように受け入れ，自分たちの文化をつないでいくかということについて批評文を書く。（レポート）
11	十七音の世界を味わおう －俳句の創作に挑戦－	俳句を批評しているテレビ番組を視聴し，十七音で場面を描くための工夫の仕方について考える。その後，いくつかの俳句を読み，季語や切れ字の効果などから読みを深める。	一人一枚の風景写真を用意し，その場面をどのように表現するか，言葉を吟味して一句詠む。その後句会を開き，相互評価する。（レポート・創作俳句）
12	大人になるとはどういうこと？ －アルトゥーロ＝ヴィヴァンテ「灯台」－	陸と海，光と闇，少年と灯台守など，対比された表現と時代背景を重ね，灯台が象徴していることについて追求し，語り合う。	象徴表現や情景描写を通して考えた「少年らしさ」や「大人になること」について，Ａ４一枚程度にまとめる。（レポート）
	私の初恋物語 －島崎藤村「初恋」－	文語定型詩の「初恋」を読み，林檎によって象徴される淡い恋心や，起承転結が明瞭な四連構成による二人の距離感の変化を読み取る。	今まで学習してきた情景描写，象徴表現，段落構成を取り入れて，創作「初恋物語」を 800 字程度で書く。（創作物語）

（3）　題材配列とカリキュラム

３年間の学びを考えたとき，１年生で「読みの視点」を習得する単元を意識的に重ねている。「段落構成」「情景描写」「色の描写」「象徴表現」「伏線」と

いった視点をもつことによって，より深い読み取りができるようになる。それらの視点をもって様々な作品を関連付けながら読むことで，主題に迫る読みや，根拠のある考えを発言することにつながっていく。２，３年生では作品の抽象度を上げ，複数の作品を比較して自分はその主張をどのように捉えるかなど，子どもたち自身が自分の意見をもつことを大切にしている。作品を通して自分の生き方を考えることにもつながるからである。

また，カリキュラムを考える際に，他教科で何を学んでいるかということを把握している。例えば【資料4】１０月の実践「筆者の主張を比較分析しよう」という単元は，英語の「What is important to communicate with people who have different cultures?」という題材と重ねて実践した。英語の授業では異文化の人たちと関わる上で大切にしたいことを具体的な事象から考察し，ディベートを行った。そのことを踏まえ，国語の授業では異文化理解について述べている四つの随想や説明文の読み比べを行った。それぞれの主張を比較分析することを通して，自国の文化をきちんと理解した上で，互いの国の文化を尊重することが，人と人とのつながりを大切にすることにつながることに子どもたちは気づいていった。英語の授業と重ねて実践したことは，考えのさらなる深化につながったといえるだろう。

このように，題材を貫く大きなテーマを授業者と子どもが共有し，他教科とのつながりを意識して３年間の学びの積み重ねを構想している。

２．２　授業実践における「追求」の位置づけ

授業実践①「大人になるとはどういうこと？
　　－アルトゥーロ＝ヴィヴァンテ「灯台」－」
授業実践②「私の初恋物語－島崎藤村「初恋」－」
二つの実践を取り上げ，「追求」の実際を報告する。

（1）　子どもの理解の深化

静岡中では子どもたちの学びの過程を「追求」と呼んでいる。子どもたちは日々の授業で調べたことや仲間の発言から考えたことを授業中に記述し，自分の学びの足跡を残している。国語科では，個人で文章を読み込む時間のワークシートも「追求活動」として捉え，毎日の授業の子どもたちの読みの深化を見とっている。

授業後に「追求の記録」（以下，追求用紙）を集め，授業者は一人一人にコメントを返している。この時大事にしていることは，自分の読みの根拠を明確にする視点を子どもたちにもたせていくことである。直感的におもしろい，不思議だと思った部分を，具体的な叙述を根拠に語ることで，より説得力のある読みを構築することができる。また，他の作品との関連性や本文の記述のつながりなどに触れて考えられるよう，新たな視点を授業者から提示することもある。次時に追求用紙が返却されると，子どもたちはそのコメントを見て，新たな視点で作品を読み始めたり，自分の読みを客観的に振り返ったりすることができるようになっていく。

この追求用紙でのやりとりは，自立した読み手を育てるための大きな手立てとなっている。自分勝手に読むのではなく，他者に自分の考えを伝えることで，新たな読みの視点を獲得することにつながるからである。

また，個人追求のテーマとなる大きな問いは，子どもたちが話し合って決定していく。題材の本質に迫るために，どのような問いを立てたらよいのかを子どもたちは考え，意見を交わすことで価値ある問いを生み出す。その力を３年間かけて養っていく。

問いの発見，個人追求，全体共有の過程を通して，子どもたちはさらなる問いを見つけ，より深い読み取りへとつなげていくことができる。多くの読みの視点を取り入れながら，作品の本質に迫ることで，子どもたちの理解は深化していくものと捉えている。

（2）　「追求」から見られる子どもたちの変容

授業実践①「大人になるとはどういうこと？―アルトゥーロ＝ヴィヴァンテ「灯台」－」，授業実践②「私の初恋物語－島崎藤村「初恋」－」は別々の題材であるが，授業者は「初恋物語」を創作することをゴールに題材配列を行った(創作をすることは「初恋」の授業に入るときに提示した）。

まず，「灯台」を読むことで，情景描写の意図や象徴表現による読みの広がりを存分に読み味わい，物語の奥深さや表現の幅を広げていく。そして，島崎藤村の「初恋」では，四連構成で描かれる起承転結のリズム感や，時の流れの変化，登場人物の心情の揺れなどを味わうことで，文章構成の効果を学んでいく。

この二つの題材を繋げることで，子どもたちは自分がイメージした世界を文章で紡いでいくための視点が明確となり，読み手に場面を想像させる物語を描くことにつながるのではないかと考えた。以下に実践の具体を示していく。追求用紙に加え，生徒の発話，最終レポート，創作作品を取り上げる。

授業実践①　大人になるとはどういうこと？
　　―アルトゥーロ―＝ヴィヴァンテ「灯台」－

本題材は 1937 年のイタリアが舞台となっている。イタリアに住んでいた主人公の 13 歳の少年は，語学留学のためにイギリスを訪れた。そこで灯台守に出会い，灯台から見える景色に少年は心を動かされる。その１年後，今度は難民としてイタリアを訪れた少年は，再び灯台守を訪ねる。しかし，灯台守は昨年訪れた少年と同一人物だと認識することはなかった。

この作品は象徴表現が随所に描かれ，豊かな情景描

写によって，読み手のイメージをふくらめることができる作品である。最後の場面で灯台守が１年ぶりに訪れた少年を「去年と同一人物である」と認めないことは，「少年らしさ，大人になるとはどのようなことなのか」という疑問を子どもたちに抱かせる。子どもたちは以下のように感想を書いた（下線は木下による）。

・物語の中心となる灯台の中に入るまでの描写にも意図がありそう。灯台守は覚えているかもしれないが，以前とは「僕」の心が違い，少し大人になったために，同じ人物だとは思えなかったのだろう。難民になったことが不安を持たせたのかもしれない。
・海と陸は対になっているが，空はその二つをつないでいるように感じられた。
・灯台の光が「蛍の光と同じくらいちっぽけに，はかなく感じられた」とあるから，１３歳の「僕」の純粋な気持ちの終わりを表しているのかもしれない。
・気圧計が「不安定」を指しているのは，人間も同じように先がわからないということを表していると思う

このように，子どもたちは「少年と大人」「灯台の光」「海と陸」「現在と未来」といった対比の視点に注目して初読の感想を書いている。これらが「灯台」の象徴性や灯台守の行動の謎を追求したいという子どもたちの思いにつながっていった。

その後，初読の感想を交流する中で，子どもたちは「海と陸の境にある灯台は何を表しているのか」という象徴表現を追求していく問いを共有した。その後の個人追求には以下のように記載されている。

・少年は１年前のようには戻れないことには気づいている。年齢の変化だけでなく，難民になるという環境の変化もまた，少年の心を変化させたのかもしれない。
・「海と陸とを隔てる細い線の上にある」という描写から，両者をなんとかつなぎ止めるものとして描かれていると考えられる。
・灯台は船がめざす光を発する場所。未来を示す意味があるのではないか
・灯台が発する光が国によって違うことは，イタリアとイギリスの考え方の違いや，これからの戦争を暗示しているのかもしれない
・灯台に波がたたきつける描写はこれから戦争が激しくなることを暗示している
・変化していく時代の中で揺るぎないもの，中立な立場として灯台が描かれている

このとき授業者は，次のような視点で初読の感想や追求用紙にコメントを書いている。①「海と陸の境目に灯台が建つことは何を意味しているか（子どもの言葉に共感しつつ，新たな視点の追加）」②「光と闇をなぜそのように読んだのか（根拠の明確化）」③「なぜ二つは関係性があるといえるのか（描写の関連性）」など。具体的なコメントを入れることで，読みの深化を促すようにしている。

例えばＡ君を取り上げてみよう。以下のようなやりとりがあった。(追求は一部抜粋)

≪追求用紙の記述:初読の感想≫
変わったのは「僕」or「灯台守」？光と闇の対比，取り戻せない何かを若葉と表現したり難しい。情景描写が多いということはキーポイント。
＜授業者のコメント＞
確かに。この切り口から読んでいくと，変わったのはどちらかということも見えてくるかもね。
≪追求用紙の記述:初読の感想交流後≫
灯台の気圧計が「不安定」となっていること，光の後の闇が気になること。これは僕と灯台守の言う「いい子」が何かを探るべき。海と陸は心情の対極的なもの。純粋 VS 闇だと思う。
＜授業者のコメント＞
なぜ「不安定」や「闇」を表現するのかな。このことと「いい子」はどのようにつながるのかな。
≪追求用紙の記述:個人追求の過程≫
海と陸が対極的な何かなのは明確。それは多分灯台に迫ればわかると理解した。もし陸が闇というならば，灯台の光の後の闇と関係があると思う。カモメが平和を表しているならば，灯台守は社会の闇にのまれた僕を拒絶していると思う。
＜授業者のコメント＞
なるほど。カモメが表すものもポイントになるのかな。「のまれた」とするならば，灯台は何を示す？

このように，授業者は子どもの読みを肯定的に受け止めながらも，描写のつながりや考えの根拠となることについて質問することで子どもが自分の読みを自覚化したり，さらに深い読み取りができるよう促したりしている。

1 年時より，どの題材でも問いを共有し，個人追求を重ねているため，追求用紙の使い方は子どもによって異なる。図示して考える子どもや，複数のトピックを自分で立て，それぞれについて分析する子ども，対比構造を明確にして記載していく子どもなどである。追求用紙はＡ４用紙に大きな枠だけが書かれた簡単なものである。その中に自分たちなりの分析の仕方で記入していく。授業者が一人一人の学びの状況を把握するために，読み取った内容や新たに生まれた疑問も記入するように伝えている。３年間の積み重ねによって，一人一人に差はあっても，自分なりの読みやその根拠となる部分を取り上げることはどの子どもにも定着し

てきている。

問いを共有した際には，これから読み取っていくための視点を確認する。今回は「灯台が象徴していること」「少年と灯台守の関係の変化」という２点を挙げて追求に入った。視点を挙げておくことで，読み取りが苦手な子どもも文章を読み込むための切り口を確認できる。授業者のコメントによるフィードバックや，同じ視点で読み進めている仲間との共有などを通して，子どもたちは読み取りを深めていくことができる。

個人追求後には，それぞれの考えを共有する一斉授業を行った。以下は 2019 年 11 月 26 日の授業での発話の様子である。繰り返しや言いよどみ等は一部削除したが，ほぼ発話の通りである。

生徒Ａ：「光がついたり消えたりするこのリズムは，世界中みんな違うんだよ。だから，船長は，明かりを見て拍子をとれば，世界のどこの灯台の光なのか分かるのさ。」ってあるから，世界中みんな違うっていうのは，国ごと違うっていうのもそうだし，国ごとっていうのは人間ごと違うっていうのもあらわしているとしたら，灯台の投げかける光は，ついたり消えたりするタイミングが人によって違って，だから，僕がもう一回灯台に明かりを見に行った後に，灯台の投げかける光が広々と照らしていたんだけど，光の後に続く闇がこれまでになく濃く見えたってあるから，それが，難民になるっていうことをあらわしているっていうことを思った。その光はいい方のことだけど，難民っていう状態は光が消えた状態，灯台の光が消えた状態なのかなって思いました。

生徒Ｂ：灯台守がどこにあるかって言ったじゃん。大人と少年の境目ってあったじゃん。灯台守って光と闇の両方知ってるって板書に書いてあるけど，その灯台守が，灯台に居る瞬間だけ，なんかちょっと少年に戻れるっていうかそういうところじゃないかなって思って。なんでかっていうと僕が１回目に入るときになんか，その灯台守の姿が，「興味をもって訪ねてくる人がもっと居てもよさそうなのに」っていう文章があったじゃん。だから，その灯台っていうのはやっぱり，大人がそこにいても少年に戻れるっていうか，そういう場所でもあるんじゃないかなって思いました。灯台が何をあらわしているかって思って，Ｄさんがさっき言ってたのが気になっているんだけど，「興味をもって」っていう文章があったりとか，「この人は知らない人に灯台を見せるのが仕事であって」みたいな文章があったじゃん。だから，灯台を見せることによってその人に人生のヒントを与えるのも灯台守の仕事なんじゃないかなって思って，光を見ればどこの国かっていうのもわかるっていうから，その光を見れば，その人自体がどうなっていくかもわかるんじゃないかなって思って。だからその灯台っていうのは未来を暗示しているっていうことにつながってくるかなって思いました。

生徒Ｃ：今Ｂさんが言ってくれたことと，さっき言ってた，実際の船は海から灯台を通して陸に上がるみたいなことと関連付けて考えたんですけど，実際の船は海から灯台の光を見て，陸はこっちだなっていう風に気づいて，陸に行くじゃないですか。船の動きを実際の人生に置き換えてみると，少年から灯台っていう何かしらのきっかけがあって，そこから陸が大人の象徴と考えたら，その陸に上がるイコール大人になるっていう感じじゃないですか。この物語中に出てくる僕は，その自分にとっての変わるきっかけが灯台だったと思うんですけど，全人類大人になるきっかけが灯台っていうわけではなくて，人それぞれの灯台っていうか人生が変わるきっかけみたいなものがあるんじゃないかなって思って。それを物語に落とし込んだときに，人それぞれ灯台が違うと思うんですよ。一人一人それぞれ一人一つの灯台をもってると思うんですよ。そう考えたときに，違う国の灯台だと，発する光の種類が違うみたいなっていう話があって。人によって灯台が違うから発する光も違って，この先，灯台の後に待ってる陸の姿も違うんじゃないかなって思ったんですけど。

このように，子どもたちは「灯台」の象徴性を通して，子どもから大人になることの意味を考えていった。その読みが深まっていくことで，自分の人生が変わるきっかけが人それぞれにあるのではないかという視点をもち，自分と作品世界とをつなぎながら，読みを構築していくことができた。

最終レポートでは以下のように，象徴表現を読むことによって見いだされたことや，自分の人生について記述されていた。

- 象徴を読むということは，文字で書かれていない物語の内側を読むということ。新しいものを見て好奇心をもってワクワクする姿が少年らしさであり，海の描写をなくすことで，子ども心を忘れてしまったことを表している
- 灯台が描く「光」と「闇」の描写がぐっときた。光と闇は自分を変えるきっかけであり，自分を振り返らせるきっかけとなるもの。対比から迫ることで，自分の読みを深めることができる
- 灯台自体の意味は時間軸にあると思う。未来を示す灯台にいる灯台守は，少年の指針として描かれていて，大人になっていく少年を導く「灯台」の役割だったのかもしれない
- 13 歳から 14 歳への変化は私にもあったと思う。上の学校に進んで，多くのことを知って，社会のこと

も世の中の仕組みも見えてくると，自分があきらめたり，一歩引いたりしなければいけないこともある。少年は難民としてイタリアに向かった。その気持ちの変化は一度見た灯台よりも灯台守に会いたいという気持ちで表現されていると思う

・私たちでいうと，これは受験期に似ている。今まで親がほとんど決めていた将来のことを自分で決めるようになり，学校を選ぶ必要がある。しかも高校となれば，義務ではなくなるので毎日が選択の連続となる。もう後には戻れないことを自覚して，光のある灯台を目指して進まなければならない

このように，子どもたちは「灯台」と「灯台守」をつなげて考えたり，自分自身の経験と結びつけたりしながら象徴表現の広がりを味わうことができた。その中で，子どもから大人へと成長することの意味などを自分と照らし合わせて考えていく姿が見られた。

授業実践②　私の初恋物語―島崎藤村「初恋」－

本題材は七五調のリズムによって，淡い恋心が表現されている四連構成の文語定型詩である。この単元では起承転結が明確な四連構成や「林檎」に象徴される恋心のイメージを読み取り，そのような表現の効果を取り入れて物語の創作につなげたいと考えた。そこで詩の読み取りをしたあと，「初恋」をテーマにした物語を創作することを第１時に共有した。

「自分が初恋物語を書く時にはどのような表現を使うか」という視点で読み進めていくことで，「好き」という言葉を使わずとも「君」に対する思いを表現し，徐々に近づいていく距離で恋の成就を表す表現の工夫を味わうことができた。

「初恋」の読み取りについて語り合った後，島崎藤村の巧みな表現描写や，今まで学習してきた物語の表現をヒントに，実際に自分たちで創作活動に入った。

子どもたちが物語を書く時のポイントとして挙げた点は「象徴表現」と「情景描写」「文章構成」の３点であった。完成した創作物語などを読むと，今までの読書経験や，授業における新たな作品との出会いが，子どもたちの豊かな表現につながっているといえる。以下は子どもたちが書いた「初恋物語」である。

① 「あっ」淡々とした無機質な板書の音の中に，音楽室からもれた吹奏楽部の練習の音が聞こえた。桜の花が散り，若緑に包まれるこの頃。第一回定期演奏会に向けて吹奏楽部は，より一層練習に力を入れだしていた。音楽室は俺が補習を受けている教室からは遠かったが，数学準備室からは廊下を挟んで隣という近さだった。補修の１コマ目が終わり，コンパスを借りに数学準備室に向かったとき，俺はふと音楽室の中をのぞいてしまった。20 人ほどで奏でられる音の中に俺は，フルートを吹く百合ちゃんの姿を探していた。百合ちゃんは肌が白く，背が小さい女の子だった。その容姿から「白雪姫」と呼ばれていた。教室から鬼山先生の怒鳴り声が聞こえた。気づいたら俺は彼女に見入ってしまっていたようだ。俺は急いで補習に戻った。

２，３コマ目も無事に終わり，もう日が落ち始めている時間だった。どの部活も活動を終え，下校している人もいた。俺は借りていたコンパスを返しにもう一度数学準備室に足を運んだ。音楽室をのぞくのは癖になっていたのかもしれない。

ある日，もう誰もいないと思っていた音楽室に百合ちゃんと同級生の山崎君がいた。二人の表情は照らす太陽のせいか，とても輝いていた。

「山崎君，百合ちゃんのこと好きなんだって。」

「え，マジ。美男美女でお似合いだな。」

そんな会話が耳に入ってきた。急に胸に痛みが走った。なんとなくその場にいてはいけない気がして，俺は早々と下校してその場を去った。

帰り道，いつも通っている道なのに違う。光のすべてが痛い。通り行く人々は異界の言葉を話す。知らない世界だった。俺の記憶にある音楽室は，音が豊かで迫力があり，それでもどこか虚しいものとして焼きついた。（全文）

② アラームの音が遠く聞こえる。だんだん近づいてくる。手を伸ばしてボタンを押し，けたたましいその音を止める。眠い目を擦りながら着替えを済まし，リビングへ行く。そう，今日も何も変わらない「日常」の１ピースでしかない。（中略）胸のあたりからドクドクとした音が聞こえ，視界がゆがんだ気がした。が，彼はやがて校門の方へと歩き出した。心なしか，立てていないはずの足音が響いてくるようだった。いや，気のせいだろう。向こうの二人には聞こえていないのだろうから。廊下の窓から見た景色が不意に滲んだのは，そのとき降っていた雨のせいであったり，あるいはそうでなかったり。（一部抜粋）

③ 陸上部の練習が終わった頃には，真っ赤な夕焼けが広がっていた。いつもと変わらない一日を終えた僕は，教室へ向かった。今日中に済ませるべき課題が鞄に入っていなかったのだ。（中略）くしゃっと笑う顔は，何倍も大人びて見えた。僕も彼女と同じような景色を見てみたい。何かに夢中になったときに見える景色を。そんなことを考えながら，彼女を見えなくなるまで見つめていた。（一部抜粋）

子どもたちは自分の経験と切り離し，一人の作家として創作活動に取り組んだ。テーマは同じだが，一人一人の表現の工夫が見られる。恋が成就しない結末を迎える作品や，初恋のイメージを桜や卒業式，入学式

などの春の景色と重ねるものが多かった。それらの描写は，登場人物の話し方や展開の工夫に現れている。

このような表現活動を通して，自分の生活や読書経験を振り返ったり，今までの作品の描写を生かしたりすることで，子どもたちの表現の幅を広げていくことができる。そして，子どもたち同士で作品を読み合い，批評することによって，言葉が吟味され表現が精選されていくと考えている。

（３）　授業実践①②を通して見られた子どもの姿

この二つの実践を通して，子どもたちは題材の本質に迫るために「象徴」や「文章構成の工夫」などの視点で読み深め，自分の表現につなげていくことを意識化できているといえるだろう。これらの子どもの姿は，３年間実践を重ねていく中で，繰り返し読み，表現することを繰り返してきたことの成果であるともいえる。

このように，題材を意図的につなげていくことで「象徴」や「対比」「文章構成」といった概念を獲得していくことは，子どもたちの読みを深めていくことにつながる。そして，その読みを構築した先には，題材と自分を重ね，自分の成長を客観的に捉え直したり，これからの人生に対してどのように生きるかを考えたりしていく姿があるだろう。題材と自分の内面との重なりや，異なった価値観と出会うことは，読書をすることの楽しさにもつながっていくはずである。

２．３　授業実践と定期考査問題の捉え

静岡中は前後期制をとっており，定期考査は１，２年生が８月末と２月中旬の年２回，３年生が８月末に年に１回実施している。定期考査の回数は少ないが，授業者は追求用紙に丁寧に目を通し，コメントのやり取りをすることで，子どもたちの学びの過程を見とっている。また，学習の成果としてまとめたレポートなどで評価を重ねているため，定期考査の回数を多くしなくても評価することができている。

以上の実態から，定期考査では授業で扱った教材文をそのまま出題することはせず，説明文においても小説においても初見の文章を出題することとした。授業で十分に語り合い，本質を読み取った子どもたちの姿が，どのように活かされるのかを見とることが大切だと考えたからである。

【資料５】は2019年８月に実施した３学年の定期考査問題の実際である。このように問題を出題していくことで，子どもたちは作品が変わっても象徴表現を通して人物の心の動きが表現されていることや，筆者の主張を通して自分なりの価値観を表現していくことを学んでいった。

テスト後の子どもたちから，「『線は，僕を描く』を授業で取り上げて，みんなで考えてみたい」「全文を読んでみたいので，図書室に本を入れてほしい」「早速本屋で買って読んでみた」「前に読んだことがあったが，一部分を切り取ると登場人物の印象がずいぶん違う」など，作品そのものに興味をもった感想を聞くことができた。また，姜尚中の文章に対しては「自分にとって『働くこと』は家族を養うことが一番大切だと思うが，そこに生きがいがあることや，他者から認められる喜びがなければ頑張れないかもしれない」といった新たな価値観に気づいた発言も聞かれた。

授業で扱った題材以外の作品や文章に触れることが，子どもたちにとって読書の幅を広げたり，新たな価値観に触れたりする機会になる。このことは，自立した読み手を育てる上で重要なことだろう。定期考査でも思わず読みたくなるような作品に出会わせることは大切にしたいことである。

また，出題した問題は，ほぼ記述で解答させることにもこだわっている。その作品のどの部分を根拠として，何を読み取ったのかという子どもの学びの足跡を大事にしてきたからこそ，定期考査でも見とっていきたい部分である。子どもたちが読み取っていく過程を見とることは，授業者が育みたかった子どもたちの姿

【資料５:2019年度第３学年定期考査問題の構成】

大問	内容	授業との関連
1	漢字，語彙に関する問題	指定された出題範囲の問題集を使い，各自で学習を進める。３年間同じ問題集を使い，繰り返し学習できるようにしている。
2	説明的文章 姜尚中　『何のために「働く」のか』	「生きること」について様々な文章を通して考えてきたことを活かせる作問をした。「社会に出ること」と「他者から認められること」の視点から考え，働くことの意義や自分らしさについての考察ができるような問題を出題した。
3	小説・物語 砥上裕將　『線は，僕を描く』	象徴表現や情景描写，人物像について読み取ってきたこと活かせる作問をした。主人公が自分の内面さえ描く水墨画を通して自分と向き合っていく姿を描写から読み取り，水墨画を学ぶことを通して成長していく主人公の心の動きについて出題した。
4	古文	静岡県の公立入試を意識し，初読の文章でも読めるよう，説法が含まれている文章から，内容を問う問題を出題した
5	条件作文	「すごい生き物図鑑」から４つの生き物を提示し，その生き物の魅力を「すごい」という言葉を使わずに説明する文章を書く。資料の比較や文章の比較を行ってきているため，必要な情報を整理して 180 字以内で書く問題を出題した。

を見とることでもある。また，定期考査後の教室では，子どもの記述した内容を授業者が紹介したり，子どもたちに発表させたりすることも多い。そのことによって，授業者自身も子どもの姿から自分の実践をふり返り，足りない部分を育むために，次の題材をどのように組んでいくかを構想していくことができる。

このように，定期考査問題は，授業で培った子どもたちの姿がどのように活かされるのかを見取る場として，また，授業者も子どもも共に自分の学びをふり返り，さらなる読書経験や新たな価値観との出会いにつなげる場として位置付けられる。だからこそ，教材選定にこだわり，題材構想を工夫していくことが重要であると改めて感じている。

3　おわりに

報告した実践から示唆される点を以下に整理する。

① 「生き方を考える」という大テーマに沿った価値ある多くの作品を読んで対話し，表現にひらくカリキュラムである。

② 読みの視点（構成，描写，象徴等）を獲得させる，他教科の学習と連関させる，子どもの切実感を生む題材を選択して配置する等，子どもの熟達と理解の深度を重視するカリキュラムである。

③ 探求型学習の基本を，問いの発見，個人追求，対話による全体共有と捉え，その探究過程でさらなる問いの発見と，題材の本質的な読み取り，深い思索を実現させている。

④ 問いの追求過程を記録する追求用紙は，教師が子どもの学びの過程を見取り支援するものとなっている。その意味で，子どもの自己評価と相互評価，教師による評価を統合する機能を有する。

⑤ 定期考査は教師が子どもの学習を見取る場であり，同時に，子どもも教師も自分の学びをふり返り，さらなる読書経験や新たな価値観と出会う場として位置付けられる。

次に，本稿の執筆動機について若干の補足をしておく。繰り返し述べたように，静岡中は，題材と出会った子どもたちが問いをつくり，その問いを共有することで追求をすすめていくことや，対話を通して題材の本質に迫っていく姿を「文化を味わう姿」として重視している。国語科においても，子どもの発話や追求の分析によって学びの深化を確認してきた。研究協議会等においても，当日の公開授業で見られた子どもの姿や発話内容を中心に協議が行われてきた。しかしながら公開授業で見られる姿やふるまいは，日常的な授業実践によってこそ培われるものである。その点については，例えば 2018 年度教科別協議会（国語）において「このような発言や話し合いができるようになるには，スキル学習を取り入れているのですか」とご質問いただいた（「取り立てたスキル学習は行っておりません」とお応えした）。この点に正対するには，カリキュラムや学習指導の系統性を含めた提案が必要となるが，まずは，日常的な授業実践を報告するところから始めたいと考え，本稿の執筆に至った。

最後に，カリキュラム構想の視座について仮説的に述べておく。【資料 2～4】は，読書対象として文学作品を多く扱っているが，表現活動としては対話を含め，論理性を重視している。特に単元の締め括りの表現活動は，創作からプレゼンテーションまで多岐に渡るが基本はレポートである。対して読書対象としての説明的文章は，複数の文章を扱って題材化し，２・３年に集中的に配置している。結果として，１年生で文学作品を読む方法知の獲得，２年生で価値あるテーマ（自然・環境保護・日本語・戦争等）を題材とした論理的・説得的な表現の獲得，３年生でより抽象度の高いテーマ（自由・異文化・大人・成長等）を扱った文学的・論理的表現の彫琢という緩やかな系統が認められる。学校教育全体で言語力の育成が求められる現在，国語科の教育内容をどう策定し構造化していくかは，カリキュラムのオーバーロード問題にも通じる喫緊の課題である。この課題を解決する上で，読書と表現における文学性・論理性のバランスと配置に留意し，子どもの「学び」の視点に立った題材構想をしていくことが一つの視座になると考えられる。

引用・参考文献

・静岡大学教育学部附属静岡中学校・村山功（2019）『対話が深める子どもの学び―「教科ならではの文化」を味わう授業―』明治図書

・坂口京子（2018）「国語科教科書における言語活動（「批評」）の提示形式の比較と検討―「ディズニーランドという聖地」（能登路雅子）・「握手」（井上ひさし）の事例検討―」『国語科教科書における言語活動例の提示形式と学習展開の実態に関する研究』（平成 27～29 年度公益財団法人教科書研究センター教科書等調査研究委託事業報告書）

・アルトゥーロ＝ヴィヴァンテ「灯台」　『中学校国語３』学校図書

・島崎藤村「初恋」　『国語３』光村図書

・姜尚中「何のために「働く」のか」　『新編新しい国語３』東京書籍

・砥上裕將「線は、僕を描く」　講談社(2019)

附記

報告した授業実践の範囲，分析の視点や方法については木下・坂口により決定し，「２授業実践と評価」は木下，「１はじめに」「３おわりに」は坂口が執筆した。本稿における子どもの発話は，授業の記録ビデオから文字起こししている（静岡中研修部杉山慎一郎教諭による）。なお本実践は，科学研究費（基盤研究（C）「言語力の体系と系統に関する実践研究」（研究代表者：坂口京子，16K04682）の研究対象である。